

ユダヤ人の3大祭りの一つ仮庵際には、パレスチナに住む人だけではなく、全地に散らされているユダヤ人（ディアスポラ）たちもエルサレムに来る。その祭の4日目に、それまで姿を隠していた主イエスが突如エルサレム神殿の境内で教え始められる。今日の所に入る前に、この7章において主イエスを取り巻く人々のことを確認しておく。

まずは、「ユダヤ人たち」(1節)。彼らは主イエスを殺そうとし「**イエスを捜し**」ていた(11節)。32節によると彼らは「**祭司長たちとファリサイ派の人々**」、つまり当時の宗教指導者たち、権力者たちである。

次は、「**群衆**」。彼らは仮庵の祭りのために、全土、全世界から来ているので、エルサレムの権力者たちが主イエスを殺そうと計画していることを知るよしもない。だから20節で「**あなたは悪霊に取りつかれている。だれがあなたを殺そうというのか**」と言っている。

最後に、もともとエルサレムの住民たちで、仮庵際に参加している人々。彼らはエルサレムに住んでいる関係で、「**ユダヤ人たち**」が主イエスを殺そうと計画していることを何かしらで知っている。「**エルサレムの人々の中には次のように言う者たちがいた。『これは、人々が殺そうとねらっている者ではないか』**」(25節)

このように、殺そうと思っている宗教権力者たち(当局者)、それからそれを全然知らないで都に来た地方の巡礼者の群衆、それに殺そうと思っている計画は知っているが、しかしどうなるかを見守っているエルサレムの市民の群れが、この祭りの時に主イエスを囲んでいる。

25—26節。「**エルサレムの人々**」の驚きの反応が記されている。

「**あんなに公然と話をしている**」。13節にあるように「**ユダヤ人たちを恐れて、イエスについて公然と語る者はいなかった**」のに、主イエス御自身は「**公然と話をしている**」ということに驚きをおぼえる。何故なら、主イエスを殺すと言っている「**議員たち**」(当局者)は「**何も言われぬ**」から。そこでエルサレムの人々はいく「**議員たちは、この人がメシアだということを、本当に認めたのではなからうか**」。

【新改訳改訂第3版】「**議員たちは、この人がキリストであることを、ほんとうに知ったのだろうか。**」

【NKJV】 Do the rulers know indeed that this is truly the Christ?

しかし、すぐにこれを打ち消す。その理由は、第一に「**わたしたちは、この人がどこの出身かを知っている。メシアが来られるときは、どこから来られるのか、だれも知らないはずだ。**」(27節)。ではこの人(イエス)がどこから来ているのだと知っているのか。この後の41節には「**メシアはガリラヤから出るだろうか**」とある。この言葉のように、彼らは主イエスが「**ガリラヤ**」から来たということを知っている。

ところが、彼らの学んでユダヤ教の理解では、「**メシアが来られるときは、どこから来られるのか、だれも知らないはず**」(27 節)である。それで、主イエスがガリラヤの田舎から来たと分かっているからには、彼はメシアではない、とこうエルサレム市民は結論をくだしている。

ここには、当時のユダヤ人たちのメシア理解というものを確認することができる。マタイによる福音書 2 章 1 節以下のクリスマス物語の中で、占星術の学者たちが「**ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか**」と言ったとき、ヘロデ王は祭司長たちや律法学者たちを皆集めて問いただすと、彼らは間髪入れず「**ユダの地、ベツレヘム**」である、旧約聖書ミカ書に書いてあると答える。「**メシア**」はベツレヘムから、という理解は、ヨハネによる福音書の先ほどの 7 章 41 節に続く 42 節にも記されている。

もう一つの理解は、「**隠れたるメシア**」思想である。

この思想によると、メシアは隠れていて、たとえ地上に現れていても暫くの間人知れず生活していて、ある時忽然と公に現れるまでは、彼は人には知られないでいる、という思想である。例えば、メシアはユダのベツレヘムから生まれると預言したミカ書 5 章 1 節には、同じ節で「**彼の出生は古く、永遠の昔にさかのぼる**」とある。だから、メシアはとっくの昔から存在しているのだけれども、しかし実際に登場して現れるまで隠れているのだ、という考えが出てくる。

旧約聖書最後のマラキ書 3 章 1 節にも「**あなたたちが待ち望んでいる主は、突如、その聖所に来られる**」と預言されている。

メシアは、ユダのベツレヘムで生まれて、そして“メシアだ、メシアだ”と、ちやほやされながら育って大きくなっていくというのではなく、どこかに人知れず、来ていた、ただ、隠れている。それがある時「**突如**」と現れるのである。

これも、もう一つの大きなユダヤ教の信仰として、当時はびこっていた。

このようなメシア理解に浸っている「**エルサレムの人々**」に向かって、主イエスは「**大声で言われた**」(28 節)。この「**大声で言われた**」と訳されている言葉(κραζω、クラゾー)は、ヨハネによる福音書では 4 回使われている(1:15、7:28、37、12:44)。1 章では洗礼者ヨハネが「**声を張り上げて**」言ったとなっている。いかにも大事な事を語っていることを描いている。

「**あなたたちはわたしのことを知っており、また、どこの出身かも知っている。**」(28 節)

【NKJV】 "You both know Me, and you know where I am from;

【TEV】 Do you really know me and know where I am from?

ここでの主イエスの言葉は、彼らが主イエスのことを本当に知っている、どこの出身かも知っているということを確認することではなく、それらは表面的なこと、地上的なこと、肉体的なことであって、本当に私のこと、わたしがどこから来たのか知っているのか、という問いである。この理解に基づく訳をしているのが TEV である。

宗教改革者カルヴァンは主イエスのこの言葉を次のように解説している。

「反語的に語っているのである。彼(イエス)は、彼ら(エルサレムの人々)が間違っ  
て心に抱いている意見に、真実なものを対置させている。彼(イエス)はいわばこう  
言っているのだ。あなたたちは、地上ばかりを見つめているので、わたしをす  
っかり見知っているように思っている。だから、わたしを何の尊厳にも値し  
ない無名の男として、軽蔑しているのである。しかし、神は、わたしが天から  
来た者であることを証しするだろう。」

28 c—29 節.

**「わたしは自分勝手に来たのではない。わたしをお遣わしになった方は真実であるが、  
あなたたちはその方を知らない。わたしはその方を知っている。わたしはその方のもとから  
来た者であり、その方がわたしをお遣わしになったのである。」**

主イエスの本当の出所はどこからかという、それは神から遣わされてきたという天  
的な出身であり、しかも、主イエスを遣わされた方を人々は知らない。主イエスの起  
源、出身は人々には全くのミステリーである。この事を主イエスはここで言いき  
っておられる。

しかし、この時の主イエスの目の前にいる人々は「エルサレム」に住む人々である。  
選民ユダヤ人の中の、それも神殿がある聖なる都エルサレムの住民である。だ  
から、彼らは、「あなたたちはその方を知らない」と言われると、選民、それも  
エルサレムに住む住民としてのプライドが許さない。そこで、「人々はイエスを捕  
らえようとした」(30 節)のである。

しかし彼らが、神様のことを知っている、信じていると言っても、彼らは、  
主イエスをお遣わしになった父なる神様についても知らない。そのことはこの  
後の 33, 34 節で「今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる。それから、  
自分をお遣わしになった方のもとへ帰る。あなたたちは、わたしを捜しても、  
見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができ  
ない」と言われた時、彼らは、「いったい、どこへいくつもりなのか」(35 節)、  
「その言葉はどういう意味なのか」(36 節)と繰り返し疑問文を語っているよ  
うに、何も分かっていない。

この後の 8 章 14 節で主イエスは彼らに答えて言われる。

**「たとえわたしが自分について証しをすとしても、その証しは真実である。自分  
がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っているからだ。し  
かし、あなたたちは、わたしがどこから来てどこへ行くのか、知らない。」**

皮肉な結果がこのようにして暴露される。

ユダヤ人でエルサレムの住民であれば、メシアは“隠れたるメシア”でなければ  
ならない。どこから来てどこへ行くのか、何もかも実情がわかり切っている、  
平凡な、日常お付き合いできるような人間は、メシアではない。メシアは、  
もっと神秘的な神々しいメシアでなければならない。と、知ったかぶり  
で言っていたが、実はそのようにいう時、彼らは、メシアを遣わす神様  
そのものを知っていない。神様そのものが、そういう彼らから隠れて  
おられる。

「イエス・キリストを通して神を知るのでなければ、真の神を知ることはできない。」

これは宗教改革者カルヴァンの有名な教理である。イエスをキリストと信じ、イエス・キリストを通して知るのでなければ、そこで「知った、知っている」と言っている神は偶像の神に過ぎない。

**「人々はイエスを捕らえようとしたが、手をかける者はいなかった。イエスの時はまだ来ていなかったからである。」** (30 節)

「**イエスの時**」とは、神様が定める時のことである。人々は、神様に反して何一つできない。

31 節

**「しかし、群衆の中にはイエスを信じる者が大勢いて、『メシアが来られても、この人よりも多くのしるしをなさるだろうか』と言った。」**

ここでの「群衆」は、主イエスを捕らえようとしている「エルサレムの人々」とは異なり、ユダヤ当局者の影響を受けていない人々と言えよう。彼は素直にイエスを信じたが、しかしその理由は、主イエスが「**多くのしるしをなさる**」方であるからである。ここでも 2 章の 23 節以下の言葉が厳しく響いてくる。

**「イエスは過越祭の間エルサレムにおられたが、そのなさったしるしを見て、多くの人**がイエスの名を信じた。しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった。それは、すべての人のことを知っておられ、人間についてだれからも証ししてもらう必要がなかったからである。イエスは、何が人間の心の中にあるかをよく知っておられたのである。」